

「ラストピース」

第
12

話

水
瀬
真
理
佳

へ登場人物一覧へ

鈴木理菜（18）大学1年生

高橋湊（23）理菜のアパートの隣人

花村夏凜（18）理菜の親友

市川拓也（18）理菜の親友

市川拓也（18）理菜の親友

西原圭吾（18）市川の友達

成宮翔（18）市川の友達

白水透（54）バーのマスター

佐々木俊哉（45）ニュースサイトの編集長

塚目凜子（34）護身術の師範

吾妻豊（46）（55）長野県警の刑事

奈良坂壮一（26）（35）長野県警の元刑事

竹内魁（20）高橋の兄

高橋正雄（69）高橋の叔父

山下春子（63）竹内の小学校の元担任

阿部司（12）？

阿部宏樹（58）理菜の主治医

阿部美里（49）阿部の妻

阿部樹（24）阿部の次男

丸川 榮吉（87）鍛冶職人

丸川 榮太朗（65）榮吉の息子

丸川 宏美（60）丸川の妻

○古諏訪町・住宅街

「売物件」という看板が立った空き家が目立つ住宅街。

高橋湊（23）はバイクを押しながら、鈴木理菜（18）と住宅街の中を進む。変わり果てた街の姿に言葉を失う理菜。

高橋「大丈夫？」

理菜、頷く。

理菜「話には聞いてたんだよ。あの事件から人が少なくなつて、街も変わっちゃつたつて。うちの家も取り壊してるしね。でもいざこの景色を目の当たりにすると……」

高橋「そうだよな……」

と、安心させるように理菜の肩に手を回す。

その時、理菜のスマホにメッセージがくる。

理菜「お母さんから名簿きた！」

高橋も理菜のスマホを覗く。

高橋「どう？ 見覚えある名前とか」

理菜「ない……」

高橋「そっか……」

高橋 M「理菜が生まれる前に教室をやったってことは、ピアノを習ってたのは少なくとも理菜より5〜10歳は年上の人間。事件の時は14歳〜19歳くらいのはずか……」

○古諏訪駅・前

待っている元刑事・奈良坂壮一（35）の元に刑事・吾妻豊（55）がやってくる。

奈良坂の口角が上がる。

奈良坂「昨日、いくらでした？」

吾妻「いらねーよ」

吾妻は覚悟を決めた顔をしている。

奈良坂「本当にいいんですか……？」

吾妻「いいから大人しく奢られとけて」

奈良坂「そうじゃなくて……！来てくれたってことは、協力してくれるんですよね……」

：？ それってつまり：：「

吾妻「おいおいお前が言い出したくせに。さては急に怖くなったか？」

奈良坂「真犯人を捕まえたら：：上は間違いなく全責任をなすりつけてきますよ！？先輩がここまで積み上げたものが一瞬で崩れる：：」

吾妻は大きく息を吐く。

吾妻「お前言ったろ。罪のない竹内に全部押し付けて、そこまでして守らなきゃいけないものなんてこの世にないって。俺もその通りだと思う。そんなん得た地位や名誉なんて何の意味もないよ」

奈良坂は吾妻の言葉を噛み締めて頷く。

○古諏訪町・住宅街

理菜と高橋は話しながらロープで囲まれた空き地にたどり着く。
その一面には多種多様な花が咲いている。

高橋「ここで、合ってる？」

理菜「うん、間違いない……」

と、目を丸くして釘付けになる。

すると杖をついた老婆がやってくる。

老婆「アンタたちも手合わせにきたんかい？」

高橋「ここって、9年前に亡くなった前田さ

んのお宅で合ってますか？」

老婆「合つとるよ。綺麗じゃろー」

高橋「誰かが植えたんですか？」

老婆「いやいや。誰がちゅーわけじゃねえ。

最初に誰かがチョロっと種まいたんだろう

ね。ほいたら手を合わせに来る人みんな種

もって来るようになったって、いつの間にか花

畑みてくなっただわ」

高橋「そうだったんですか」

老婆「ホントは人ん家にこんなことしたらダ

メなのかもしれないけど、こうでもしねえ

と悲しくて寂しくて苦しんだ……決して忘

れちゃいけない、でも、あれは忘れたいくら

いひどい出来事だったよ」

理菜の目からはボロボロ涙が溢れている。

理菜「きつと、みんな天国で喜んでいると思います……『ありがとう』って言ってます」

と、涙を拭いながら一生懸命言葉を紡ぐ。

老婆「そんだといいなあ」

と、老婆が優しく理菜の背中を撫でる。

老婆「ほれほれ、せっかく来たんだからアンタたちもやってきな」

と、種を渡す。

理菜「はい……！」

高橋「ありがとうございます」

理菜と高橋は種を蒔いて手を合わせる。

先に目を開けた高橋が人の気配を感じて後ろを振り返ると、吾妻と奈良坂がこつちを見ている。

※ ※ ※

（フラッシュ）

○古諏訪警察署・前

吾妻（４６）や奈良坂（２６）たちが
竹内魁（２０）を車に乗せる時に目が
合う高橋湊（１４）。

※ ※ ※

両者とも時が止まったようにお互い見
つめて固まる。

○高速道路ＳＡ・駐車場・車内

一台の車が停車。

車内の前には吾妻と奈良坂、後ろに理
菜と高橋が座っている。

重く張り詰めた空気。

吾妻「こんな所まですまない。古諏訪だと目
立つからな」

奈良坂「田舎はどこで誰に話聞かれてるか分
からないですしね」

吾妻「改めて、長野県警の吾妻です」

と、肘掛けに名刺を出す。

奈良坂「元長野県警の奈良坂です。今は東京
で会社員をしています」

と、同じく名刺を差し出す。

吾妻「当時我々は古諏訪夫婦殺害事件を担当
していた、」

すると吾妻の話を途中で遮って、

高橋「よく覚えてますよ。アンタらが魁を移
送するところを見たので」

奈良坂「そうだね……」

理菜「恐る恐る……あの、お2人はどうしてき
つきうちの前にいたんですか……？」

吾妻と奈良坂がアイコンタクトを取っ
て、

吾妻「俺たちは今独自にあの事件を洗い直そ
うとしてる」

理菜「え？」

高橋「（煽るように）どうして今さら。だっ
てあれは魁がやったんですよね？ だから
魁を捕まえたんだろ！」

吾妻「……真犯人は別にいる。竹内魁くんは
無実だ」

高橋「ハッ……その証拠は？ 根拠は？」

吾妻「あの日、竹内くんが職場へ向かうために前田さん家の前を通りかかった時、家から飛び出してきた男とぶつかったと話していた。竹内くんの同級生だそうだ」

奈良坂「前田さんの家から、竹内くんではない別の男が出てきたのを見たという証言もあつたんだ」

理菜「茜ちゃんだ……」

高橋「……そんなの、いくらでもねじ曲げられますよね。実際アンタらはそうしたんだろ！？」

吾妻「……ああ、その通りだ。そして我々警察が、竹内くんにありもしない自白をさけてしまった。君のお兄さんは殺人犯じゃない」

それを聞いた瞬間、高橋はドアを開けて車の外に出る。

理菜、吾妻、奈良坂も続いて車から出る。

高橋、立ち止まったまま、

高橋「ハッ……ハハハッ……」

と、壊れたように肩を振るわせながら
笑いを漏らす。

理菜は静かに高橋に近づく。

高橋は3人に背を向けたまま、俯いて
目元を手で隠しながら、

高橋「……（絞り出すような声）良かった

……」

と、まだ肩を震わせている。

理菜は溢れそうになる涙を堪えながら、
高橋の背中を優しくトントンとする。

○バー・店内（夜）

マスター・白水透（54）、編集長・

佐々木俊哉（45）、師匠・塚目凜子

（34）が集まって、理菜と高橋が連

れて来た吾妻と奈良坂の話を聞く。

吾妻「我々は警察として……いや、人として

あるまじきことをしてしまった。決して許

される行為じゃないのは分かってる。一生

かけて償わせてほしい。本当に申し訳なかった」

と、一同に土下座をする。

奈良坂も同じように頭を下げる。

すると誰よりも先に白水が立ち上がる。

佐々木「マスター……」

白水の動きを読んだ佐々木が止めようとするが、白水はそれを振り払い、吾妻の前に膝をついて胸ぐらを掴む。

白水「謝るくらいならなんでやった？　なあ。」

この9年間、魁が一体どんな思いで過ごしたか、家族がどんな日々を送ってきたか、想像したことあるか？　被害者は？　遺族の思いはどうなる！　こんなどうしようもない俺ら大人たちの首全部揃えたって償えねえぞ！」

珍しく声を荒げる白水に、しばらく誰も何も言えない。

そして高橋が白水の隣にしゃがむ。

高橋「マスター。証拠なんて何もなかったの

に、魁はやってないって一緒に信じてくれたマスターが、どうしようもない大人なわけじゃないじゃないですか。だから自分のこと、そんな風に言わないでください」

すると凜子も白水の隣にしゃがみ、白水の肩をトントンとする。

凜子「そうですよ。そんなこと言ったら佐々木さんなんてどうなっちゃうんだってね」と、はにかむ。

佐々木「そうですよ……って、誰がどうしようもない大人だコラ」

高橋「ふっ。自覚なかったんだ」

理菜「あはっ」

佐々木「あ、今理菜ちゃん笑ったな」

理菜「（口角を上げたまま）すみません」

佐々木「湊、お前は後でしばく」

メンバーのいつものやり取りに白水の頭も冷える。

白水「……取り乱してすみません。改めて詳しく話を聞かせてもらえますか」

吾妻「もちろんです」

と、立ち上がる。

× × ×

改めて7人がテーブルを囲んで吾妻たちの話を聞く。

吾妻「スマホの隠し撮りを印刷したものだから画質は悪いですが、良かったら」

と、捜査資料の写真を並べてくれる。

奈良坂「バレたら大問題なので、持ち出しは厳禁をお願いします」

吾妻「あの日、前田さん達を殺害したのは阿部司。竹内くんによると小学校の同級生で、

あの日前田さんの家から飛び出して来た彼とぶつかり、血のついた凶器が落ちたらしい。

そのまま阿部は逃走。家の中に入った竹内くんが事件の第一発見者となった」

高橋「阿部……魁からそんな名前は聞いたことないな」

吾妻「みなさん、阿部忠義はご存知です？」
佐々木「政治家の？ 確か元経済産業大臣だ

よな」

奈良坂「阿部一族は、元々古諏訪の大地主で、政界だけじゃない色んな業界にパイプがあるんです。古諏訪はずっと阿部ファミリーに支えられてると言っても過言じゃない」

凜子が「古諏訪 阿部」で検索すると、阿部建設や阿部法律事務所、阿部病院などが出てくる。

凜子「ほんとだ」

佐々木「なるほど。それで警察にも圧力がかかり、湊の兄貴は濡れ衣を着せられたわけか」

吾妻「阿部の関与は早々になかったことにされたので、今こちらの手元には阿部に関する情報がほとんどない。だから当時竹内くんのことで聞き込みに行った北諏訪小学校の元担任・山下春子さんに、今度は阿部の話を聞きに行こうと思ってます」

高橋「担任じゃなかったけど、俺が通ってた時もいた先生だ。一緒に行きます」

吾妻「分かった」

理菜「あの、私も行かせてください！ ママ
がやってたピアノ教室の生徒名簿に、阿部
司の名前があるんです！」

理菜は全員にピアノ教室の生徒の名簿
を見せる。

奈良坂「ということは、何かしらの動機があ
ったのか……」

理菜「ママたちと面識があつたってことは、
私も何か思い出せるかもしれないから」

吾妻「分かった。一緒に行こう」

白水「2人のことを頼みます」

吾妻「はい」

× × ×

それぞれ帰宅しようとしている中、吾
妻が持ってきた捜査資料の中に佐々木
が気になる写真を見つける。
なんの変哲もない包丁の写真。

佐々木「これが使われた凶器か？」

奈良坂「はい。確か刃渡18センチの、一般

的な包丁でした」

佐々木、目を凝らして、

佐々木「この写真、データでもらえるか？

扱いには十分注意する。調べ終わったら必ず消すから」

奈良坂「分かりました。吾妻さんにもらって

おきます」

佐々木「助かる」

○長野・山下家

和風の一軒家。

表札には「山下」の文字。

吾妻と奈良坂が前、理菜と高橋がその後ろに立つ。

吾妻が呼び鈴を押すと「はい」という声と共に引き戸が開き、元教員・山下春子（63）が出てくる。

吾妻「突然すみません。長野県警の吾妻です」

と、警察手帳を見せる。

春子「（冷たく）警察の方が一体なんのご用

でしょうか」

奈良坂「少々お話を伺えないでしょうか。9年前の事件のことで」

春子の目の色が変わる。

春子「（冷たく）竹内くんについてはあの時お話ししたことが全てです。殺人なんてそんな恐ろしいことするようないつて。もう帰ってください！」

と、無理やり扉を閉めようとする。

高橋「待ってください、先生」

と、前に出る。

春子「あなたは……？」

高橋「高橋湊です。竹内魁の弟の」

春子「湊くん……と……？」

と、理菜の方を見る。

理菜「鈴木理菜と申します。9年前の事件で家族を亡くしました」

春子「そう……あなたが……」

高橋「先生、阿部司について教えて欲しいんです」

阿部の名前を聞いて春子の目が泳ぎ、
ゴクリと喉を鳴らす。

吾妻「阿部司、ご存知ですよね」

春子「……どうぞ中に」

と、全員を家の中に招き入れる。

○同・居間

5人でこたつを囲む。

春子「阿部くんの何が知りたいんですか？」

吾妻「全て。先生が見たこと聞いたこと感じたこと知ってること。全て教えてください」
「17

春子は深呼吸をしてから話し始める。

春子「1年と2年、それから5年と6年時に
私は彼の担任でした。休み時間は教室で本
を読む大人しいタイプの子で、1人である
ことが多かったと思います。そんな彼があ
る時、珍しく校庭に出て砂いじりをしてた
んです。何をしてるのかと話しかけたら、
彼はアリを集めてました」

奈良坂「アリ？」

春子「正確には、自分で潰したアリの死骸を集めてました。ペットボトルいっぱいに」

一同は怪訝な顔をする。

春子「どうしてそんなことをしたのか理由を聞くと、『お母さんがアリが嫌いだから』と、生き生きした顔で答えました。きっと彼はお母さんに褒めてもらいたい、役に立ちたい、そんな一心だったと思うんです。でも、どんな理由があれ、生命を自分の手で殺め、それを集めるなんて明らかに常軌を逸した行動です。私はすぐにお母様に連絡をして、お話ししました」

吾妻「それで、母親の反応は？」

春子「特に驚いた様子もなかったことからすると、彼のそういった行動に家庭でも心当たりがあったんでしょうね。ご家族にお医者さんがいるので相談すると言ってそれきりでした」

奈良坂「その後阿部の様子は？」

春子「3年4年と私は担任を外れましたが、

その件があつて阿部くんのは氣にかけ
ていました。ちょうどその頃ピアノを習い
始めたみたいで、彼はずっと音楽室にいま
した。楽しそうにピアノを弾く様子を見て
安心したんですが……」

吾妻「ですが……？」

春子「5年生になって、彼は不登校に。その
ままほとんど学校には来ないまま、小学校
を卒業しました。それ以来私は会っていま
せんし、聞くところによると中学も通えて
いなかったみたいです」

吾妻「そうですか……」

奈良坂「なるほど……」

高橋「先生。阿部の写真はありますか？」

春子「確か卒業アルバムが。ちよつと待つて
てね」

春子が小学校の卒業アルバムを持って
きて、ページを開く。

春子「この子です」

春子が指を指したのは、口元にホクロ

がある大人しそうな色白の男児・阿部
司（１２）。

写真を見た瞬間、理菜と高橋がハッと
する。

吾妻「どうかしたか？」

理菜「（声を震わせながら）この間、港区の
事件現場にいた人にそっくり……」

吾妻「本当か！？」

理菜が頷く。

高橋「（深刻な顔で）具合が悪くなった理菜
を連れ出して、俺が来るまで理菜のそばに
いました。間違いない、こいつだ」

吾妻「接触到に來たわけか……」

理菜「あの！ 彼が音楽室でよく弾いてた曲
を覚えてませんか！？」

春子「ごめんなさい、さすがにそこまでは
……」

理菜『ロンドン橋落ちた』ってイギリスの童
謡、弾いてなかったですか……？」

春子「ロンドン橋……ああ！（口ずさむ）

ロンドン橋落ちるゝ落ちるゝ落ちるゝつて
曲。よく口ずさみながら弾いてたわね。確
か大好きな曲だって―

理菜の顔がこわばる。

理菜「間違いない。あの人だ……ママにピア
ノを習ってたんだ。だからうちにいたんだ」
奈良坂「これは……決まりですね」

吾妻「ああ。理菜さんに接触して来たってこ
とは、もうすぐそこまで迫って来てるな」

春子は複雑そうな表情。

○同・玄関（夕方）

吾妻「ご協力ありがとうございました」

春子「やっぱり竹内くんはやってないんです

ね……！？」

吾妻「（力強く）はい」

春子は安心したように胸を押さえる。

春子「じゃあ真犯人は……いえ、なんでもあ
りません」

吾妻「真犯人は必ず捕まえます。例えそれが

どこの家の人間でも、誰の教え子であつても」

春子「（心苦しそうに）……そうですね」

高橋「先生」

春子「うん？」

高橋「魁がやってないって信じてくれて、ありがとうございました」

春子は高橋を見てしみじみ、

春子「こんなに立派になって……よく頑張ったね。次はお兄さんと一緒にいらっしやい
待ってるから」

高橋「はい！」

○バー・店内（夜）

営業が終了し、理菜と高橋は店内の片付け中。

いつものように佐々木と凜子がカウンタ―で飲んでいるのを白水が相手。

高橋のスマホに高橋正雄から着信。

高橋「もしもし」

と、電話に出る。

理菜が高橋の様子を見守っていると、
高橋がスマホを耳から離してフリーズ
する。

理菜「湊くん？」

すると白水たちも高橋の異変に気づい
て集まってくる。

高橋「魁が……意識不明？」

と、放心状態。

見かねた白水が電話をかわる

白水「もしもし白水です。スピーカーにしま
すね。もう一度状況を説明してもらえます
か？」

理菜、椅子を持ってきて高橋を座らせ、
安心させるように肩に手を置く。

高橋正雄の声「今朝職員が部屋に行ったら魁
が倒れてて意識がなかったらしい。そのま
ま信州総合医療センターに運ばれたそうだ」
凜子「待って、病気がわかった時点で、医療
の刑務所に行くもんじゃないの？」

佐々木「どういう判断だったのかは分からんけど、あれは確か全国にも4箇所だけで、もちろん長野にはない。それに準ずる施設だって、数はそんなに多くないはずだ」

白水「それで、魁の状態は？」

高橋正雄の声「全身がかなり弱って、抵抗力も落ちてる。もうあまり猶予はないだろうと……」

白水「……湊、どうする？」

凜子「どうするも何も、会いに行かないと！」

しかし高橋は険しい表情で迷っている

理菜「湊くん……？」

高橋M「これが最期になるかもしれない……だけど……結局まだ何も解決できてないのに、どのツラ下げて会いに行けんだよ……冤罪晴らすって約束しただろ！」

と、葛藤する。

凜子「会いに行けばいいんだよ！？」何も迷

う必要なんてない！」

と、熱くなる。

佐々木「凜子……」

と、宥める。

高橋正雄の声「湊、聞いてるか？」

高橋「……うん」

高橋正雄の声「俺が会いに行ってくつから、こっちは心配すんな。お前は今自分がすべきだと思うことをやりやあい。大丈夫、魁はちゃんとお前のことを待ってる」

高橋の瞳から迷いが消える。

高橋「うん……ありがとう叔父さん」

通話を終え、通夜のような空気を変えるように、

理菜「犯人はもう分かってる。あとは証拠でも自白でもなんでもいい。阿部司がやったってことさえ証明できれば」

佐々木「その件なんですけど、もしかしたら解決の糸口が掴めるかも」

白水「何か気づいたのか？」

佐々木はスマホで撮影した捜査資料の凶器を見ながら、

佐々木「はい。ちょっと調べてきます」

高橋「俺も行く」

佐々木「お前はこっちにいろ。阿部司はもう

理菜ちゃんに接触してきたんだ。またいつ

現れてもおかしくない」

高橋「……そうか。そうだな」

白水「頼んだぞ佐々木」

凜子「私も何か役に立てることあればいいんだけど……」

と、申し訳なさそうにする。

理菜「じゃあ凜子さんに1つお願いしてもいい

いですか！」

凜子「私に？」

理菜は頷いて、

理菜「護身術を教えてほしいんです」

凜子「それは全然構わないけど……」

理菜「この前みたいに阿部司が接触してきて

も、今の私じゃ何もできない。せめて自分

の身は自分で守れるようになりたいんで

す！　お願いします！」

白水「いいかもしれないな。あくまで護身のためにね」

凜子「よし分かった。私に任せなさい！」

○護身術の教室・中

ジャージを着た理菜と凜子が向かい合う。

理菜「よろしくお願いします」

と、足を肩幅に開いて構える。

凜子「それじゃあ行こっか」

理菜「ここでやるんじゃないんですか？」

凜子「まずはランニング。ほら行くよ！」

と、走って行く。

理菜「は、はい！」

と、慌てて追いかける。

× × ×

理菜と凜子がランニングから戻ってくる。

理菜「ハア、ハア、ハア」

凜子「よし、じゃあ次は」

今度こそ護身術だと思い構える理菜。

凜子「腹筋100回からの腕立て3分チャレンジ。用意はじめ！」

と、スマートウォッチでタイマーを測り腹筋を始める。

理菜「はいっ！」

と、慌てて腹筋を始める。

× × ×

凜子「あと5秒、4、3、2、1、しゅうりょう！」

一緒に腕立て伏せをやっていた凜子はまだまだ体力が残っているが、理菜は終わった瞬間力尽きる。

理菜「自分の体力のなさに落ち込みます」

凜子「そんなことない！理菜ちゃん根性あるよ。かなりフルスロットルでやっちゃったもん。ごめんね」

理菜「（言いづらそうに）あの、凜子さん

……」

凜子は理菜が何を言いたいかわかる。

凜子「もっと組み手みたいなのすると思ってた？」

理菜「いや、その……はい。もちろん基礎体力が必要なのは分かってるんですけど……」

凜子「そういうのもこれからちゃんと教えるから安心して。一朝一夕で身につくものじゃないからね」

理菜「ですよね……」

凜子「だけどね、この先理菜ちゃんが1人で戦えるようになったとしても、何かあった時はまずは全力で逃げることを考えてほしい」

理菜「戦えてもですか？」

凜子「そう。私ね、逃げるが勝ちって言葉を作った人は天才だと思ってる。本当に強い人はね、逃げるのも上手いから。だから理菜ちゃんも、まずは逃げることを第一優先にしてほしい」

理菜「もし、どうしても逃げられない時は？」

凜子「そういう時はね、何もしない。もし相

手が同じ空間にいるなら、会話して、とにかく時間を稼ぐ」

理菜「え、会話？」

と、拍子抜け。

凜子「そう。こっちのペースに巻き込んでひたすら会話を続ける。そしたら私や湊が必ず駆けつけるから。それまで持ち堪えられそう？」

理菜「……はい、頑張ります！」

凜子「まあ理菜ちゃんがそんな状況になるなんて、湊が絶対に阻止するだろうけどね。噂をすれば」

と、ガラス張りの教室の外を指差す。
外には高橋が迎えに来ている。

理菜がニコツと笑う。

○アパート・高橋の部屋（夜）

高橋「どうだった？ 特訓」

理菜「すでにあちこち筋肉痛。湊くんたちに追いつくには、相当時間がかかりそう。頑

張るけどね！」

と、気合が入っている。

高橋「そんな頑張る理菜にプレゼント」

と、箱を渡す。

理菜「開けていい？」

高橋「うん」

理菜が箱を開けると、中には高橋と色違いのベルトのスマートウォッチが入っている。

理菜「湊くんと同じの！ 私が買うかずっと

悩んでたやつ！」

高橋「まだ買ってなくて良かった」

理菜「これほんとに貰っていいの？」

高橋「もちろん」

高橋は箱からスマートウォッチを取り出し、理菜の左腕につける。

高橋「これ結構万能なんだって前に話したの覚えてる？」

理菜「うん。電話とかメッセージも送れて、写真も撮れるんだよね」

高橋「そうそう。他にも、撮影してる動画をリアルタイムで遠くにいる相手に共有もできたりする。だからもし、万が一理菜に何かあった時も、必ず役に立つと思うから。お守り代わり」

理菜「ありがとう。大事にするね」

高橋は優しく笑うが、その顔はクマが目立ち、頬も痩せ、疲れが溜まってる。

その表情に胸が痛む理菜。

高橋の頬に手を添えて、

理菜「阿部司は必ず捕まえられる。そしたらすぐお兄さんに会いに行こう」

高橋「（深く同意）うん」

高橋は理菜の手の上に手を重ねる。

○総合病院・精神科・診察室の中

主治医・阿部宏樹（５８）が理菜の診察中。

理菜「この間を取り乱してすみませんでした。

私だীব變でしたよね」

阿部「氣にしないでいいよ。あれから無茶なことはしてない？　大丈夫？」

理菜「……してない、です」

阿部「ハハッ。理菜ちゃんはすぐ顔に出るね」

理菜は苦い顔をしながら、

理菜「この前9年ぶりに古諏訪の家に行って来ました。もう家自体はないんですけどね」

阿部「ああ。例の真犯人探し？」

理菜M「え……？」

理菜は阿部の言葉に違和感を覚えながら、

理菜「ただの里帰りです。あの頃とは街もすっかり変わっててビックリしました」

と、咄嗟に返す。

阿部は何事もなかったかのように、

阿部「そうなんだ」

と、いつもの笑顔を見せる。

理菜もその場に合わせて口角を上げるが、その目は戸惑っている。

○阿部家・外観（夜）

広い庭付きの立派な洋風の一軒家。

阿部が仕事から帰宅すると、隣の家に
住む品のいい老婦人が声をかける。

老婦人「お帰りなさい」

阿部「どうも、こんばんは」

と、爽やかな笑顔で家の中に入って行
く。

○同・リビング（夜）

阿部が帰宅すると、妻・阿部美里へ4

9 ーが出迎える。

美里「おかえりなさい。ごはん食べるでし
よ？」

阿部「いや、いい」

美里「……そう」

阿部「司は？ 最近何か変わったことは？」

美里「……（隠すように）何も。相変わらず

部屋にずっとこもってる」

阿部「そうか。司が家から出ようとしたら止

めてくれ。最近物騒な事件も多いからな」

美里「む、無理よ！」

阿部「なんで？ 部屋から出てないなら何も

難しくないだろ」

美里「それは……」

阿部「頼んだぞ」

と、リビングを出て行く。

美里「その物騒な事件を起こしてるのは一体

誰だと思ってるの……」

○三田大学・食堂

理菜、複数人がけのテーブルに座って
パソコンを開いている。

検索ドライブに「阿部宏樹」と入力し
て検索しようか迷っていると、親友・
花村夏凜（18）が隣にやってくる。

夏凜「いたいた。理菜」

理菜「夏凜！」

理菜は画面を隠すようにさりげなくパ
ソコンを閉じる。

夏凜は隠されたことに気づいているが、
あえて触れない。

後ろから親友・市川拓也（18）、同
級生・西原圭吾（18）、成宮翔（1
8）もやってくる。

西原「お疲れー」

成宮「あれ、今日湊くんは？」

理菜「バイト。人足りなくてお願いされたん
だって」

成宮「そっか。残念」

夏凜「拓也たちこれからカラオケ行くんだっ
て。私たちも行こうよ！」

理菜「ごめん今日はちよっと……荷物の受け
取りあるから帰らなきゃ」

夏凜「えー！　じゃあ受け取り終わったらお
いでよ！」

理菜「たまってる家事もやらなきゃいけない
からごめん、また今度！　楽しんできて
ね！」

理菜は荷物をまとめてそそくさとその

場を後にする。

○同・校門の外

アパートとは反対の方向に歩いて行く
理菜。

夏凜「水臭いぞ鈴木理菜ー！」

市川「帰るんじゃないのかよー」

理菜が足を止めて振り返ると、夏凜と
拓也が立っている。

理菜「2人ともなんで……！」

市川「アイツに頼まれてんだよ。俺がいない

時は理菜を頼むって。言われなくても分か
ってるっつーの」

理菜M「湊くん……」

夏凜「何か困ってるんでしょう？ 私たちに相
談しないでどうするの！」

理菜はとても言いづらそうに口を噤む。

○カフェ・店内

市川「なるほど。阿部司と理菜の主治医・阿

部宏樹が繋がってる、もしかしたら家族かもしれないってことか」

夏凜「先生には本当に話してないんだよね？

犯人が別にいることも、こっちが真犯人を探してることも」

理菜、頷く。

理菜「先生には事件のことを思い出せそうとしか話してない。本当は冤罪だって言おうとしてたんだけど、結局言わなかった。それなのに私が真犯人を探してるって分かるのは、つまりそういうことなのかって：

：先生の苗字も阿部だし」

夏凜と市川は返す言葉が見つからない。

理菜「最低だよね。ずっとお世話になってる先生を疑うなんて」

市川「でも阿部なんて別に珍しい苗字じゃないし。たまたま古諏訪に有名な阿部一族がいるだけで、必ずしも阿部司と同じとは限らない。色んな阿部さんがいてもおかしくないだろ」

理菜「そう。だからどうしても先生が無関係
だって証拠を見つけて、自分のこんなバカ
な考え、早く捨てたい」

夏凜「ねえ、私いいこと思いついちゃった」

○総合病院・裏口

草木の影から出入り口の様子を観察す
る理菜と夏凜。

スマホをスピーカーにして市川と会話。

夏凜「こちら病院裏口、職員玄関異常なし。

どうぞ」

市川の声「どうぞ、じゃねーから！ いいこ

と思いついたってただの尾行かよ！ ……

どうぞ」

理菜「拓也も『どうぞ』って言いたかったん
だね」

と、笑う。

夏凜「私たち探偵になれるかも。卒業したら
事務所立ち上げる？」

市川の声「お喋りもいいけど頼むから見逃す

なよー。そっちの方が出てくる確率高いんだから」

夏凜「分かってるって。大丈夫、こっちには理菜がいるし。ね？」

と、言ってるそばから阿部が出てくる。

理菜「小声」先生出てきた！」

市川「声」ナイスタイミング」

夏凜「タクシー乗るかも」

理菜「拓也合流できそう？」

市川「声」今走ってる！　タクシー捕まえといて！」

阿部が手を挙げてタクシーを止める。

その後方で理菜と夏凜も手を挙げてタ

クシーを止める。

2人が乗り込むところで市川が猛ダッシュで向かってくる。

夏凜「はやっ！　さすがサッカーバカ！」

市川「聞こえてんぞー夏凜！　さっさと乗れ！」

3人はタクシーに飛び乗る。

理菜「前のタクシーを追ってください！」

3人に乗せたタクシーが走り出す。

○住宅街・阿部家・前

高級そうな戸建て住宅が立ち並ぶ。

阿部に乗せたタクシーが家の前で止まり、阿部が下車。

理菜たちのタクシーは離れた所で止まり、車内から阿部が家の中に入るのを見届ける。

市川「ちょっと見てくる」

と、車を降りて表札を見に行く。

表札には「阿部」と。

確認した市川がタクシーに戻ってくる。

市川「自宅で間違いないと思う」

夏凜「問題はどうかやって阿部司との関係を調べるか、だね」

市川「俺にいい作戦がある」

と、口角を上げる。

○阿部家・近所（日替わり）

市川がサッカーボールを軽やかにリフティングする。

夏凜「サッカーボールで一体何する気？」

市川「まあ見とけて」

拓也が「よっ」っと蹴り上げると、ボールは綺麗な弧を描いて家々の間に消えて行く。

夏凜「ちよっと何やってんの！？」

市川「へわざとらしく」やっべー入っちゃった」

市川の作戦を理解した夏凜は、話を合わせる。

夏凜「もー何やってんの！ 謝りに行くよ！」

夏凜と市川は阿部家の呼び鈴を鳴らす。

阿部樹の声「はい」

市川「突然すみません。こちらの庭にサッカーボールが入ってしまったんですが、確認してもらえますか？」

阿部樹の声「お待ちください」

と、切れる。

夏凜「（小声で）でもこの後どうするつもり？」

市川「まー見とけて」

しばらくしてから阿部樹（24）がサッカーボールを持って玄関から出てくる。

阿部樹「ありました。これですよね？」

夏凜「それです！ すみませんありがとうございます」

と、受け取る。

市川「おかしいな。もう1個あるはずなんですけど……」

阿部樹「僕が見た限り1つだったと思うんですけど……直接確認されますか？」

市川「いいんですか！ ありがとうございます！」

夏凜「ほんとすみません！」

夏凜と市川はしてやったりな顔で阿部樹について行く。

○同・庭

夏凜、市川、阿部樹はあるはずのない
ボールを探す。

阿部樹「ないですね」

夏凜「他のお宅に入っちゃったのかな？」

と、市川の方を向くと、市川が腹部を
押さえてうずくまる。

夏凜「どうしたの？」

市川「腹が……痛い」

夏凜「……もう！ だから飲まない方がいい
って言ったじゃん！ あの牛乳絶対腐って
たんだよ」

市川「あつためたからいけると思ったんだよ

……ああ痛い」

阿部樹「（半ば呆れながら）良かったらトイ
レ使いますか？」

夏凜と市川「すみません……」

○公園

砂場では子供達が遊んでいて、その母

親たちはベンチに座っている。

理菜、スマホを気にしながら隣のベンチに座っている。

理菜 M 「2 人とも大丈夫かな……」

母親 1 「そういえば見た？ 阿部さんとこの息子さん」

阿部という名前に反応する理菜。

耳をそばだてて会話に集中する。

母親 2 「見た見た。品の良さそうな子だった

」

母親 1 「海外の医学部に通ってて今帰ってきてるんだって。すごいよねえ」

○阿部家・リビング

市川のトイレが済むのを待っている。

阿部樹 「何か飲みますか？」

夏凜 「いえ、大丈夫です。ありがとうございます
ます」

夏凜は棚に飾られている写真を眺める。
写真はどれも阿部樹のものばかり。

夏凜「あの、良かったら家主の方にご挨拶させてもらえませんか？　お手洗いまで借りてしまったので」

阿部樹「大丈夫ですよ。両親は出かけてて今は僕しかいないので」

夏凜「そうなんですネ」

と、愛想笑い。

夏凜M「そろそろ限界だよ拓也ー！」

阿部樹「お腹、大丈夫ですかね。結構こもってますけど……」

と、トイレの方を確認しに行こうとする。

夏凜「ちょっと私声かけてきます！」

○同・家の中

市川はトイレに行かず阿部家の中を探索。

1 部屋ずつ確認して何か手掛かりになる書類などがないか確認。

1 階の部屋をひと通り確認したところ

で、2階の部屋の扉がガチャンと閉まった音がする。

下から見る限り、2階には誰もいない。

市川は音を立てないように一段ずつ階段を上って行く。

一体誰がいるのか、緊張感が高まっていく。

残り3段のところで後ろから突然手首を掴まれてビクツとする市川。

呼びに来たのは夏凜。

夏凜「（小声で）そろそろ怪しまれる」

市川「（小声で）分かった」

結局市川は階段を上り切らずに夏凜と一緒に戻って行く。

しかし2階ホールの腰壁に隠れるように人影がある。

○公園

夏凜と市川が理菜と合流。
お互いの情報を共有する。

理菜「先生の息子さん、近所で噂みたい。海
外の医学部に行ってるんだって」

市川「多分俺たちを家に入れてくれたあの人が
そうだと思う。人の良さそうなやつだった」

夏凜「両親は出かけてて家には1人」って言
ってたから、少なくとも先生の家に阿部司
はいないと思う」

理菜「一緒に住んでないだけなのかも」
夏凜「それは……」

市川は何か言いたげな顔で口を閉ざし
たまま。

理菜「ごめん今のナシ！ 疑い出したらキリ
がないよね。苗字が同じ阿部なのもたまた
まだったのかもしれない」

と、無理やり終わらせる。

○住宅街（夕方）

夏凜と市川が駅に向かって歩く。
2人とも釈然としない表情。

市川「……あの家にはもう1人誰かいた」

夏凜「え……」

と、怪訝な顔をする。

市川「家から出ないから近所に知られてないんだろうな。多分家族も存在を隠してる」

夏凜「そういえば阿部司って不登校だったんだよね。じゃあもしかして……」

市川「理菜の主治医は限りなく黒に近いかも」

夏凜「そんな……」

市川「あともう1つ俺が気になったのはこれ

と、阿部病院のHPを見せる。

閉院の挨拶が載っている。

市川「理菜が長野で通ってた病院。つまり理

菜の主治医がいた病院なんだけど、ここ8

年前に閉院したんだよ」

夏凜「8年前って、事件のちょうど1年後」

市川は頷く。

市川「単なる偶然とは思えないんだよな。俺

の考えすぎだといいいんだけど」

夏凜「長野に確かめに行こう。阿部司が何者

なのか。本当のことが分かったら、理菜に話そう」

市川「だな」

○理菜のアパート・理菜の部屋（夕方）

パソコンを開いてもう一度検索エンジンで「阿部宏樹」と検索。

総合病院の精神科部長として経歴が載っているが、阿部病院の名前はない。

続いて「阿部病院」と検索。

閉院の挨拶が載っている。

理菜「2016年閉院……8年前」

○駅・改札・ホーム（夕方）

改札に入り夏凜と別れた市川はホームに向かう。

ホームは帰りの時間帯でかなり混み合う。

市川は人混みを避けるために黄色い線の外側を進む。

アナウンス「まもなく4番線に電車が参ります。黄色い線の内側でお待ちください」

市川が黄色い線の内側に入ろうとしていると、すれ違いざまに誰かにホームに突き落とされる。

落ちる瞬間、人混みの中に全身黒ずくめの男の姿を見つける。

しかし落下した時にレールに当たった腕からゴリっという音がして市川は顔を顰め、再びホームを見た時には男は消えている。

電車はクラクションを鳴らしながら近づいてくる。

○病院・救急外来入口（夜）

1台のタクシーが到着。

理菜が飛び出す。

○同・救急外来待合室（夜）

床の案内表示に沿って理菜が走っていく

る。

待合の端の方で市川と夏凜が座って警察官と話している。

理菜「拓也！」

市川「理菜！？」

市川は夏凜に、

拓也「（ジェスチャーで）なんで理菜が！」

夏凜「（ジェスチャーで）誤魔化せなかったの！」

包帯で吊られている市川の腕を見て、

理菜「拓也、腕……」

市川「（明るく）ポキッといっただけだよ。

前に試合でアキレス腱切った方がよっぽど痛かったわ」

警察官「市川さん。もう一度聞きますけど、本当に誰かに押されたわけではないんだね」

それを聞いて理菜の表情がこわばっていく。

市川「怖いと言わないでくださいよー！全然そんなじゃないです。ただのアクシ

デント。すごい混んでたし、ホームの端歩
いてた俺も悪いし」

夏凜「今度から私たちが手繋いで歩いてあげ
なきゃダメだね、理菜」

と、場の空気を和ませようとするが、
理菜の耳には届いていない。

理菜「ごめんね……本当にごめん」

市川「なんで理菜が謝んだよ。完全に俺の不
注意だから」

理菜M「これは警告だ……阿部司からの。や
っぱりあの家にいるんだ……」

理菜、拳を強く握りしめる。

○古諏訪町・繁華街

佐々木、片っ端から金物店や刃物店に
入りスマホの写真を見せて回るが、収
穫は何もない。

ある古びた商店の前で立ち止まる。

佐々木「ここで最後かあ」

○商店の中

客はおらず、店主が暇そうにテレビで競馬の中継を見ている。

佐々木が店に入ってくる。

店主「いらっしやい」

佐々木「この包丁を作った人を探してるんだ」と、スマホで事件の凶器の写真を見せる。

刃の銘部分には変体仮名風の模様が書かれていて、木製の柄の部分には家紋のようなマークが彫られている。

店主はメガネをかけ、目を細めて凝視する。

店主「ん？」

佐々木は諦めモード。

店主「こりゃ、丸さんのやいばだろうなあ」

佐々木「知ってるのか！ 丸さんってどこの

誰だ！」

店主「丸川榮吉。古諏訪の宝だよ。鍛冶職人からしたら神様みたいな人だ」

佐々木「じゃあ、誰に作ったもんか分かる

か？ この丸いのが家紋だと思っただけど

と、木製の柄に彫られたマークを指差す。

店主「それが丸さんとこの印だよ」

佐々木「え？」

店主「丸の中に3本線で丸川。まんまだろ？」

佐々木「んだよ。阿部の家紋とかじゃないの

か……」

店主「でもこりゃレアもんよ。ここに相手の

名前があるからな」

と、刃の銘部分に書かれた変体仮名風の模様を指差す。

佐々木「これ、ただの模様じゃなかったの

か！ なんて書いてあるか分かるか？」

店主「それは本人に聞きな」

と、メモ書きを渡す。

メモには住所が書かれている。

佐々木「これは？」

店主「丸さんの工房兼自宅。残念ながら本人

はいねえけど、せがれなら何か知ってるか
もしれん」

佐々木「いないってまさか……」

店主「ちゃうちゃう。5年前くらいに認知症
になって、今は施設暮らしっちゅー話だ」

佐々木「そうか」

店主「高級老人ホームだぞ。グラン、グラン
ド、スー……？」

佐々木「おいおいしっかりしてくれよ」

と、笑いながらスマホで検索する。

「古諏訪 老人ホーム グランド」で
検索するとすぐに「グランスイート古
諏訪」という高級老人ホームがヒット
する。

佐々木「グランスイート古諏訪、だろ」

店主「そーだ。それぞれ、グランすういー

と！」

佐々木「確かに立派なとこだな」

店主「だろ？ 俺も入れてもらいてえよ」

佐々木が興味本位でホームページを眺

めると、運営会社が「株式会社阿部建設」となっている。

佐々木の顔色が変わる。

佐々木「おやじさん。アンタ、最高だわ」

と、店主の手を握る。

店主「はあ……？」

○丸川家・外観

立派な数寄屋門の和式家屋。

佐々木が呼び鈴を鳴らす。

丸川の声「はい」

佐々木「突然すみません。私、佐々木と申します。丸川榮吉さんに取材をさせていただきませんか」

と、カメラに向かって名刺を見せる。

丸川の声「あいにく榮吉はもう引退しております」

佐々木「そうでしたか。失礼ですが今お話しただいているのは息子さんですか？」

丸川の声「はい」

佐々木「ではぜひ息子さんに伺いたい。多分
ご近所に聞かれたらマズイこともあると思
うんですが、このままここで話して大丈夫
ですか？」

丸川の声「……（仕方なく）どうぞ中へ入っ
てください」

○同・リビング

佐々木は遠慮なくソファに深く座る。

佐々木「いやあ、鍛冶職人って随分儲かるん
ですね。ふつかふかだ」

佐々木を出迎えた丸川榮太郎（65）
と妻・丸川宏美（60）は佐々木を警
戒している。

佐々木「警察の取り調べじゃないんですから、
そんな顔しないでください。文字起こしの
ために録音だけさせてもらいますね」

と、録音機をテーブルの上に置く。

佐々木「実はね、ぜひ見てもらいたいものが
あるんですよ」

と、スマホで例の凶器の写真を見せる。

佐々木「このマークは丸川さんのもので間違いないですね」

丸川「ええ……」

佐々木「9年前、古諏訪で起こった事件はご存知ですか？ 古諏訪夫婦殺害事件」

丸川「もちろん知ってます……あんなおぞましい事件、忘れられるはずもない」

佐々木「この包丁はその時に使われた凶器です」

丸川「っ……」

と、顔が真っ青。

佐々木「そしてこっち。私はてっきりただの模様だと思ってたんですけど、どうやら榮吉さんが書かれた文字らしいですね。これはあくまで私の予想ですが、阿部って書かれてるんじゃないですか？」

丸川「……仰る通りこれは父の字にも見えませんが、なんて書いてあるかはわかりません。でもうちから阿部さんという方には仕立て

たことはありませんので、おそらく丸川を
謳った偽物かと」

佐々木「阿部なんて珍しくもない名前なのに、
仕立てたかどうか即答できるなんてすごい
ですね。俺だったら帳簿確認しないと無理
です。それかよっぽどインパクトある「阿
部」さんがお友達にいるんですかね？ 人
には言えない、深い関係の「阿部」さんが
……」

宏美「へ焦って」あの、もう十分ですよ。
お帰りください」

佐々木「そうそう。あともう一つ。お父様の
老人ホーム、グランスイート古諏訪って有
名な高級老人ホームホームだそうです、
あそこ阿部建設が経営してるんですね」

丸川「……それが何か？」

佐々木「いえ。ただ、阿部に包丁を仕立てた
事実をなかったことにする代わりに、たっ
ぷり口止め料もらったんじゃないか、とか。
榮吉さんを自分たちが経営する高級ホーム

に破格の値段、あるいはタダで入れてやつたんじゃないか、とかね。ついつい勘ぐっちゃうんですよ。職業病でー

丸川「いい加減にしてください！　なんでそんなことを言われなきゃいけないんですか！　妄想にしたって度が過ぎてます。警察呼びますよー

佐々木「どうぞ呼んでください。ついでに聞いてみるといいですよ。榮吉さんが丹精込めて仕立てた包丁で罪のない人を殺した不届もんが、今もなお野放しになっていることもー

丸川と宏美はまるで寝耳に水という顔を
をする。

佐々木「これが俺の妄想なのかそうじゃないのか。記事にして世間にも問いかけてみま
す。今はすごいんですよ。ネット民たちが
すぐ特定にかかるんで。まあ中には事実無
根なことが拡散されることもありますけど
ねー

と、帰ろうとする。

丸川「待ってくれ！ 殺人！？ そんなことは本当に何も知らないんです！」

佐々木「分かってますよ。あなた方はなーんにも知らないんですもんね。なら仕方ない」
宏美「あなた。もう……」

と、促す。

とうとう丸川が語り始める。

丸川「父・榮吉と阿部家の忠義さんは幼馴染で親友だったそうです。彼が政界に進出してからもずっと交流があって、職人だった父は阿部一族で祝い事があるたびに、包丁を贈っていました。ところがある日突然それまで父が仕立てた包丁を全部持ってこられて、『使い物にならないから処分してくれ』と。でも切れ味に全く問題なんかなかった。気に入らなかったのなら仕立て直すと父は言ったんですが、とにかく処分しろの一点張りです。そして今までのお代だと札束の詰まったケースをいくつも持ってきて、

受け取るよう言われました。その代わり、うちとの関わりはなかったことにしろと。よく分からないけど、何か事情があるのだと思います、仕方なく受け取ることになりました。

もちろんお金は使ってません！でもそれ以来、父は一切工房に立つことをやめ、ほどなくして認知症になり、工房も畳みました。あそこのホームに入ったのは、主治医の勧めです。そんなに高い金は払えないと言ったんですが、自分の紹介だから値段は気にしないでいいと。阿部の会社が経営しているって知って、これも口止めに含まれていると察しました。断って何かされるのも嫌なので、父はそこでお世話になることにしました。これが私たちの知っている全てです」

宏美「私たちは何もしてないんですっ……！どうか信じてください！」

と、泣き崩れる。

佐々木「話してくださってありがとうございますござい

ます。最後にもう1つお願いがあるんですが」

○老人ホーム・広間

介護士に車椅子を押されて丸川榮吉
へ87）が連れてこられる。

丸川、車椅子の前にしゃがんで、

丸川「父さん。俺だよ、榮太郎だよ」

丸川榮吉「新しいスタッフさん？」

介護士「スタッフじゃないよ。榮吉さんの息子さん」

丸川榮吉「どうもお」

と、ニコニコする。

宏美「私たちのことも、自分が職人だったことも覚えていないんです」

と、佐々木に耳打ち。

丸川「父さんに見せたいものがあるんだ」

と、包丁の写真を見せる。

写真を見ても丸川榮吉は無反応。

丸川「これ、父さんが仕立てたんだよね」

しかし丸川榮吉は何も思い出さない。

宏美「もういいですよね？」

佐々木「はい。ありがとうございます」

丸川「父さんありがとう。また来るね」

一同が帰ろうとすると、

丸川榮吉「……阿部」

と、呟く。

佐々木「いま阿部って……」

丸川「父さん、何か思い出した！？」

丸川榮吉「へ幸せそうに」アイツにまた仕立

ててやんねえと。今度孫が生まれるらしい

めでてえなあ」

幸せそうに語る丸川榮吉を見て、丸川

は涙が止まらない。

丸川「そうだなっ……きつと喜んでくれるよ」

と、丸川榮吉の手を握りながら涙を流す。

宏美ももらい泣きをする。

佐々木も「良かったな」という顔。

句する。

○バー・店内（夜）

客で賑わう店内。

カウンターにいる白水のスマホに電話がかかってくるが、白水は画面を見たまま無視する。

高橋「出なくていいんですか？」

やがて着信が切れて、メッセージが届く。

へ佐々木…聞きたいことがあります、と。

白水「いや、いいんだ」

と、スマホをしまう。

理菜、テーブルにドリンクをサーブをしてカウンターに戻ってくるとポケットのスマホに通知が来る。

スマホを確認するやいなや、店を飛び出す理菜を不審に思う高橋と白水。

○同・店の外（夜）

理菜、改めてスマホを確認する。

S N S のアカウントに「君の知りたいこと、全部教えてあげる。明日14時、北諏訪小学校で。ただし必ず1人で来ること。誰かに話したら、次はこの子かも」というメッセージと共に、夜道を歩く女性の後ろ姿の写真が送られてくる。

その後ろ姿に見覚えがある理菜は震える手で電話をかける。

理菜「へ切羽詰まってーもしもし夏凜！ 今すぐ走って大通りでて！ 追いかけてられてるって助け呼んでー

夏凜の声「なになに、どうしたの？」

理菜「お願い、言う通りにして！ すぐそこにアイツがいるの！ー

夏凜の声「分かった、大通り出ればいいの？

ちよっと待って私いまパジャマだからー

理菜「パジャマ？ なんで、だって今歩いて

る……」

夏凜の声「理菜落ち着いて？ 私今自分の部屋でゴロゴロしてたの。理菜は？ 外なの？ 大丈夫？」

安心した理菜はその場に座り込む。

理菜「私の勘違いだった……ごめんね。うん、大丈夫。じゃあね」

と、切電。

するとスマホにはさらに写真が送られてくる。

1枚目の写真の加工元になったと思われる理菜と夏凜の後ろ姿を写した写真。

理菜「夏凜、よかった……本当によかった……」

と、スマホを胸に抱きしめる。

再び通知を確認すると、最後に「待ってるよ」というメッセージが届く。

（了）